

H26年から8～9月の目視による堅果類等の豊凶調査の結果に基づいて、ツキノワグマの10月以降の出没予測を行ってきた。これは、早期の出没予測によって、行政等の迅速な対応が可能になるようにするためである。H28年10月7日付けで昨秋の堅果類等の豊凶の見込みとクマの出没を予測したが、予測に反して10月以降の出没と捕獲が多くなった原因を分析したので報告する。なお、捕獲個体の年齢や胃内容物などの分析結果も加えた最終報告は3月頃に行う予定である。

1. ツキノワグマの出没、捕獲の状況

H28年のクマの出没件数（目撃、被害、痕跡、捕獲の合計）は過去7年間で最多であった。6～7月に多くて、8～9月には一旦減少したものの、10月には再び増加して11月にピークに達した（図1）。捕獲数が増加した10月以降の捕獲状況を捕獲区分別にみると、有害捕獲が36頭と少なく、錯誤捕獲が111頭と75%を占めて多かった（図2）。有害捕獲を地域別にみると、益田、浜田および県央地域が各9～12頭と多かった。一方、錯誤捕獲は益田地域が48頭と多くて、ついで浜田、県央および雲南地域が各15～26頭であった（図3）。また、捕獲個体の性比は、オス81頭（56%）、メス63頭（44%）であった。メスの捕獲個体のうち子連れが4件あった。有害捕獲は、ほとんどが放置されたカキへの被害によるものであったが、益田市では以前の大量出没年にも認めた養鶏への食害が1件発生した。錯誤捕獲のあった市町でもカキへの被害が多かったことと、錯誤捕獲の90%が箱ワナによるものであったことから、錯誤捕獲された個体の多くもカキに誘引されて人里付近に出没して捕獲されたと考えられる。現在分析中であるが、捕獲個体の胃内容物をみてもカキの出現率は高かった。なお、捕獲個体の腎脂肪指数による栄養状態は、夏季は低下して秋季に上昇した通常の指標であった（図4）。また、秋季に捕獲された個体は、皮下脂肪の蓄積が多くて、越冬に備えて十分な脂肪を蓄積していた。ただし、10～11月に捕獲された子連れメスの栄養状態は、単独メスに比べて低かった。このことは、H22年の大量出没年にも認めたが、子を伴っているために餌を探す行動が制限された影響と考えられる。

2. コナラ堅果の豊凶の再評価

9月には、クマノミズキやシバグリなどが多く実ったことから出没は一旦減少した。10月以降は、8～9月に実施した目視調査によってコナラは多く実る（並作）と予想し、人里への出没や捕獲は増加しないと予測した（10/7付け出没予測）。しかし、9～11月に実施したシードトラップ調査では、成熟種子が18.4個/m²と凶作に近い並作であって、未熟種子が88.6個/m²と多くを占めた（表1）。未熟種子はきわめて小さかったことから、クマは食物としてほとんど利用できなかつたと考えられる。未熟種子が多かった原因は不明であるが、コナラの堅果量は全県的に少ない状況であったと考えられる。

また、ブナ、ミズナラは目視での凶作の予想に合致して、シードトラップ調査でもブナは凶作（0個/m²）、ミズナラは凶作に近い並作（5.7個/m²）であった。

これらのことから、10月以降のクマの出没、捕獲件数の増加につながったと考えられる。

3. 今後の対応策

今後は、目視でのコナラの豊凶調査の評価方法についての再検討を行いたい。また、これまでの目視による豊凶調査は、ブナ、ミズナラ、コナラ、シバグリおよびクマノミズキを対象にしてきたが、今後の出没予測の精度を上げるために、低標高域に多くて、クマが利用している可能性の高いシイ、カシ類を追加して調査したい。

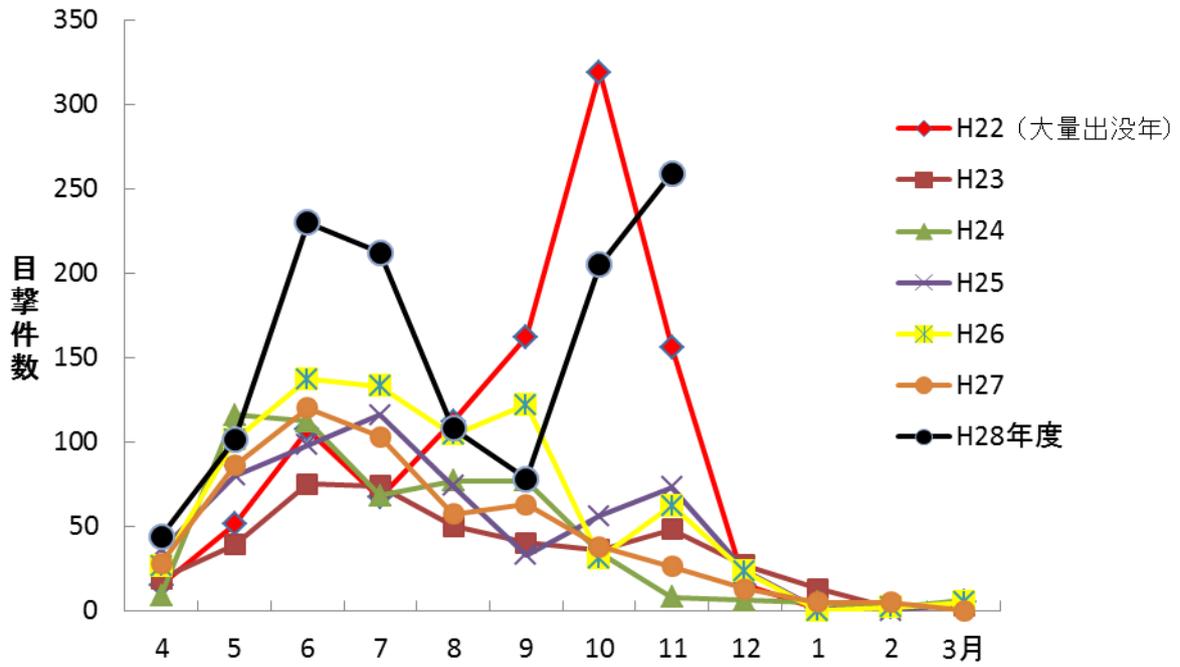


図1 ツキノワグマの出没件数の推移

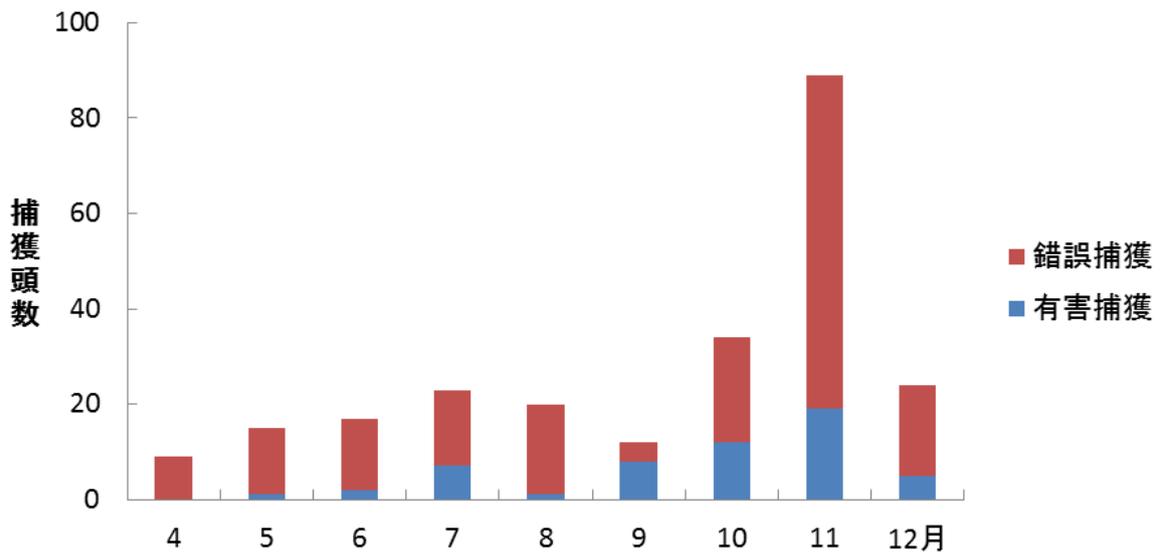


図2 H28年の捕獲区分別の捕獲頭数

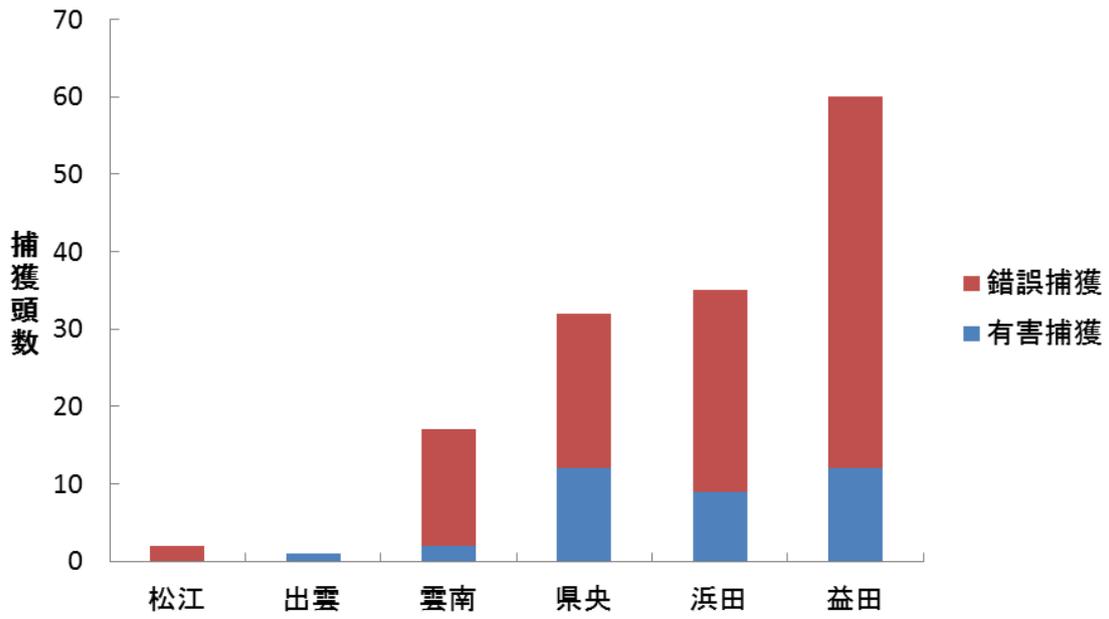


図3 地域別の捕獲頭数 (H28年10~12月)

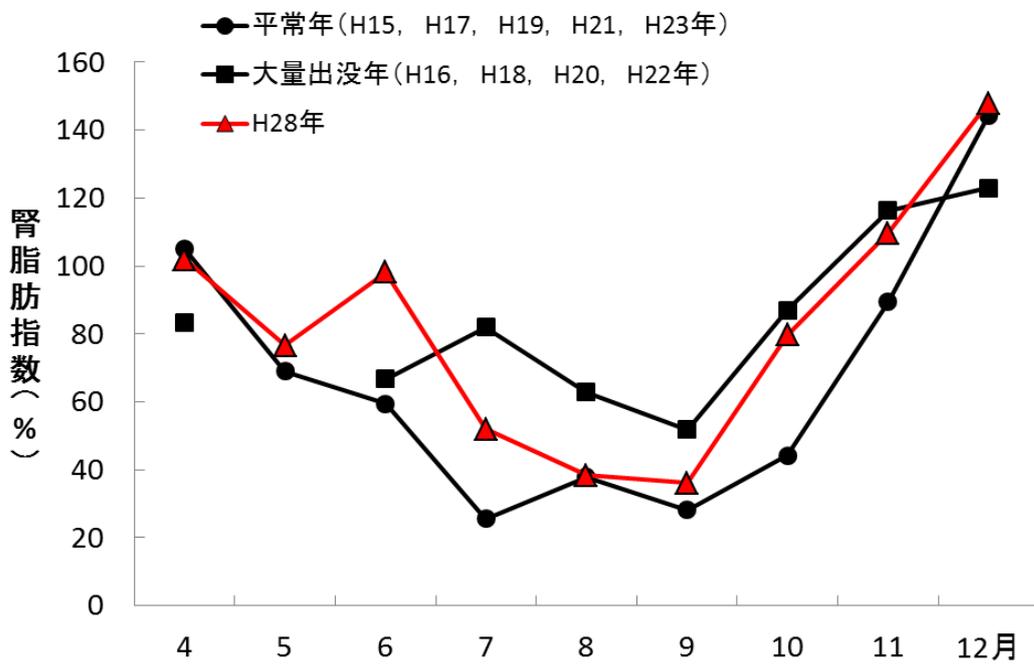


図4 平常年、大量出沒年およびH28年の捕獲個体の腎脂肪指数の比較

表1 コナラの木視調査とシードトラップ調査結果

		H25年	H26年	H27年	H28年
目視調査 (調査は9月上旬に 実施)	平均カウント数/20秒 (県全体)	8個 (凶作)	12.8個 (並作)	28.1個 (豊作)	15.9個 (並作)
シードトラップ調査 (調査は9月上旬～ 11月下旬に実施)	成熟種子	6.9個/m ² (凶作)	41.4個/m ² (並作)	103.5個/m ² (豊作)	18.4個/m ² (凶作に近い並作)
	未成熟種子	9.9個/m ²	65.6個/m ²	113.1個/m ²	88.6個/m ²